

黄 金 餅

(「利」=RIKO; 「光」=島

利 では、これから、経済学が御による、平成不況の検討、とっていきたいと思います。聞ず。この不況も少しづつ回復きた、という意見が一般的で

光 (光、たばこをプカプカふかどき利に吹きかけ)いやいや、いね。それは素人の考えだよ。

と・・・、難くなるから分かりやすい例で話をしよう、そもそも埼玉大学の教育学部の廊下なんか、見てごらん?真っ暗だよー。ちょっとでも、つけっぱなしにしておこうものなら、事務から「儉約儉約」って消されちゃうんだぜー。

利 そうですね。みなさん、先生のお話はいつも正しいですよね～～～

光 うん。ものを大切にするとえのはいいことなんだよ。だけど、しみったれたのは粹じゃねえね。だいたいだね。そもそも今時の若いもんは、ものを大切にするってえことと、しみったれってえこ・・・。

私 あ、でも先生、先生、それはまたいずれ・・・ハイ!(手を挙げて)私は本当の節約家です!!

光 ほう?本当の節約家・・・ どんな事をしているんだい?

利 はい、今年は大変な猛暑ですが、どんなに暑くても決して、ロングスカートしか履かないことにしているんです。上は、ノースリーブにキャミソール、ボトムトップを着ようと、下は必ず、ロングスカートです。

光 で、その心は?

利 「お足は極力出しません」

光 (光、たばこの煙に激しくむせる)くだらない。おまい、仙台に帰りな・・・ 皆さんに謝んなさい(利の頭を抑える)。

利 すいませんでした。

光 これ以上くだらない枕はこのくれえにして、とっとと、本題に入りな。

利 はい。その前に、確認ですが、お客さんのなかにお坊さんを本職となすってらっしゃる方はいらっしゃいますか?いらっしゃったらごめんなさい。これは洒落ですから。あたしもじつは、坊主の孫ですから。

光 あくまで洒落ですから。ご勘弁を。

利 はい、では。えええ、江戸の昔、下谷山崎町の、裏長屋に住んでおりました西念という坊さんも、毎日毎日、お布施をもらって歩き、小金をためたようですが、ふと思いついて五、六日というものは寝たつきり。そこへ、隣に住む、きんべえさんがお見舞いに来ました。

金 (=利) 「どうしたい?西念さん、かげんは。」

西 (=光) 「ええ、どうも苦しくってねえ。」

金 「お医者に診てもらいなすったかい?」

西 「いえ、お医者になぞかかりません。」

金 「どうして?」

西 「だって、お医者にかかれば薬礼というものをとられましよう。」

金 「それだって、体にはかえられないでしょうに、じゃあ、せめて、薬は飲んだかい?」



岡)

専門の島岡教授題したお話を伺き手は私中山での見通しが出てすが、先生はどうか?

しながら、ときそんな実感は無プロともなる

西「薬は九割増といまして、あんなむだなものはないそうで・・・」

金「しょうがないねえ、それじゃあ良くならないよ？」

西「自分で治る工夫はしております。」

金「何をしてんだい？」

西「水を沢山飲んで、便所へ通っています。病気が下らないかと思ひまして。」

金「くだらないこと言っちゃいけねえや。あ、そうだ、こういう時は、何か好きな者を食べるといっていいよ。何か食べたいものがあるかい？」

西「あっしはあんころ餅が大好きなんで。あんころ餅を三十個くらい」

金「三十！随分食べるねえ、まあ、いいや。買ってきてあげるから、銭を出しねえな。」

西「おあしを出すくらいなら、頼みやあしません。あなたは見舞いにきたんですから、買って下さいな。」

金「なるほど、よし、じゃ待ってな、今買ってくるから。一さ、買って来たよ。食いねえ。」

西「ありがとうございます。じゃ、あなたはお疲れでございましょうから、どうぞお家へお帰りになって一服して下さい。」

金「せっかく買って来たんだから、見ている前で食っとくれよ。」

西「いえ、あっしは人に見られていると、ものが喉を通らないたちで。」

金「そうかい？じゃ何かあったらすぐ呼びなよ。じゃ、帰るよ。・・・どうだい。しみつたれな坊主だねえ。買ってきてやったんだから、『あなたも一つおあがんなさい』ぐらいなこと、いうがいいじゃないか。みーんな自分で食っちゃおうってんだから・・・。人に見られてると、食えないと言っていたね・・・どんな食い方するんだろう？あ、壁に穴が空いているから、ちょっと覗いて、見てやろう。おやおやおや、餅のあんを全部取っちゃって、餡だけ舐めちゃったよ！んん？懐から金を出して、餅にくるんで食ってるよー！！かねもち、とでもいうのかいねー。次から次と、随分出てくるねー、あんなに持ってたのかい・・・。ああ、そうか金に未練が残って死にきれないんで、金をすっかり飲み込んで、あの世に持っていきこうてんだな？おいおい、目を白黒させ始めたよ！」

西「うーん」

金「しっかりしな、西念さん！全部吐き出しちまいな。オレの手の上に、一つでも二つでもいいから吐き出しておくれよ。西念さん！！・・・ああ、だめだ。死んじまいやがった・・・はあ。もったいないねえ。天下の通用金をみんな飲んじゃったよ・・・とれないかな？口か手突っ込んで、届かないからなあ・・・棒でつついてみようかしら・・・ところてんだと出るんだけどなあ。あ・・・そうだ！焼場へ持ってって、骨揚の時にそっくりいただいちゃおう。」



利 きんべえさんは、井戸端へ干してあった漬け物用の樽を、明日洗って返しておけばいいやてんで拝借し、西念さんの遺体を納め、長屋の住人達に西念さんの死の報告をし、西念さんが、きんべえさんの寺に一刻も早く、葬って欲しいと言った」と嘘の遺言をでっち

あげ、遺体を寺まで運ぶのを手伝ってくれる住人を募ったのでした。(大家=光)「じゃあ、行くよ！！みんな」ってんで、みんなでワイワイ言いながら、(紙芝居のように写真と地図を忙しくめぐりながら)下谷山崎町から、山下の通りへでて、上野の三枚橋を渡り、御成街道をまっつぐ五軒町の堀様と鳥居様のお屋敷の前を筋違御門から大通りへ、神田須田町へ出て参りま

して、新石町から鍛冶町、今川橋を渡って本白銀町、石町から本町、室町を抜けまして、日本橋を渡って通四丁目、中橋から南伝馬町を抜けまして、京橋を渡ってまっつぐに、尾張町を参りまして、新橋を右に切れて土橋から久保町、新し橋の坂を上がって飯倉片町。その頃、おかめ団子という団子屋の前をまっつぐに、麻布の永坂を下りまして、十番へ出て、大黒坂を上がって、一本松から麻布絶口釜無村の木蓮寺へ着いた時には、みんなずいぶんくたびれた。私もくたびれました・・・

金「さあさあ、着いたよー。それにしても、おんぼろな寺だねえ。ま、いいや。おーいい。和尚さん！起きてくれよお！」

和 (=光)「(ろれつがあやしい) 誰だー・・・こんな遅くに(ヒック)・・・あ、酒屋の小僧だなんっ？いいかあ、けえったら、親父に、そ、いっとけ！木蓮寺の和尚は一升や二升の酒で夜逃げなんかしねえってなァ！！」

金「違うよ、山崎町のきんべえだよー。」

和「ああ、ああ、きんべえさんが死んだんかい・・・」

金「おれはピンピンしてるよ！！甲いを持って来たんだよ、遅くに済まないが、引導を渡してやって下さい。百か日のしきり、いくらでやってくれる？」

和「あ？なんだ！きんべえさんかい？きんべえさんだから、おおまけで、そうだなあ、ま、天保六枚ってところだな。」

金「高い！そりゃ高いよ。五枚にしときなよー。」

和「それがだめなんだよ。坊主の労働組合の協定があるんだ。まからねえんだよ。(利が光をどついて、手を横に振って「ないないない」と首も振る。「ない？そうかい？) だめだめだめ、飲み代だあ～、六枚出しねえな。嫌なら他へ持って行ってきねえ。」

金「つけこんじゃいやだよ。だめ？まかんないの？じゃあ、ま、しょうがないや、六枚出すから、早いとこ頼むよ。」

和「しょうがないねえ、ま、もう一杯ひっかけたら、準備をして行くよ！仏さんを本堂で待ってくんな。」

利 しばらく、本堂で待っていると、寺のものは、もうほとんど質においてしまっているとみえて、^{かなっけ}金気^{かなっけ}のものが何にもない。仏様から何から何までぜ～んぶ売っちゃった。麻の風呂敷の破けた処から頭を出した、まるでほうずきのお化けみたいな和尚が、払子のかわりのはたきと、りん^{りん}のかわりの井小鉢を持って、香のかわりの煙草と番茶の粉をくべた煙とともにやってきました。そして、おくびを殺しながら・・・



和「んー、ガあーあー(金「あくびをおよしよ～あくびを～」和「出るもの、しょうがねえじゃねえか」)ウンニョアルヨーアーゼーニャッ、ウンギョウインギョウ、キンギョウ、金魚、はあなの金魚、いい金魚。なあかの金魚、セコ金魚、目がでつけえのーは、出目金魚おー、ちーん。なんまいだぶ、なんまんだぶ・・・虎がなく、虎がなく～虎が鳴いてはていへんだあー・・・犬の子があー、ちーん、なんまいだぶ、なんまんだぶ・・・汝元来ひよっとこのごとし。(立て膝)君と別れて

松原行けば、松の露やら泪やら。(立ち上がって踊る)あじゃらかなとせのきゅうらいす、(着物の裾を開いて)てけれつつのばあッ！！」

金「ストリップじゃないんだから、およしよ。」

和(もったいぶって)「では、皆さんお焼香を・・・」

金「そんなのいいんだよ、ま、皆さん、ご遠方のところをご苦労さまでしたね。これで茶の一杯でも出さなきゃいけないところなんだけど、寺が貧乏だから湯も沸いてないし、しょうがないから、ま、我慢してもらって、これから新橋の夜明かしへ行って、何でも好きなものを、飲んで食べて、自分で勘定払って帰ってくんねえ。」

みんな(=光)「冗談じゃない！」

利 ってんで、みんなが帰ったあと、焼場の鑑札を買ったきんべえさんは、寺の台所から、錆びた包丁を持ち出し、手ぬぐいにくるんで、腰へさし、樽を背負って焼場へ参りました。



金「麻布の木蓮寺から来たんだけどね、なるったけ早く、なるったけ安く、この仏を焼いとくれ！」

焼(=光)「なんだなあ、おい！驚いた客だねえ、ものごとには順繰りってえもんがあるんだ。え？そうかい？そんなに急いでるのかい？しょうがねえなあ。じゃあ、特別順繰りを繰り上げて焼いてあげるけど、その代り、一分と二百は負けられないよ。」

金「高いねえ、ま、しょうがねえ、そのかわり、注文があるんだ、他はどう焼いたって構わない、でも、腹んとこだけは生焼けにしといて貰いたいんだ。仏の遺言なんだよお。」

焼「仏の遺言？？変な遺言をしたもんだなあ。ま、それじゃ、しょうがない。明日の朝一番には焼いとくよ。」

金「他の仏の骨と間違えたりしないでくれよ、頼んだよ！」

焼「まちがいやしねえよ！」

利 きんべえさんは、夜明かしの屋台を見つけて、酒を飲んでいましたが、やっぱり気が気ではなく、またすぐ引き返して、

金「おーい、焼けたかい？焼けたかい？焼けたかーい？」

焼「焼き芋屋じゃないんだからね。こんがり焼けてるよ。いま、俺が骨を分けてやるから待ってな。」

金「いい、いい、いいんだ、自分でやるよ。」

焼「冗談言っちゃいけないよ。素人には無理だよ。これ難しいんだから、おれがオウケンのところを・・・貸してみな。」

金「だめなんだよ、仏の遺言で、俺以外骨に触っちゃいけないことになってるんだ。仏と二人っきりにさしてくれ。あっちいってくれ。」

利 やっとこ、一人になってから用意していた鱒切をだして、プツリと突いてみますと、ピカピカぴかあ~~~~山吹色。

金「あった、あった。」

利 夢中になってお金を拾い上げ、すっかり袂に入れると、きんべえさんは慌てて表へ飛び出しました。

焼「おいおいおい！！まだ骨が残ってよ！」

金「そんなの知らないよ、欲しけりゃやるよ。」

焼「誰が欲しいやつがあるか。」

金「じゃ、犬にでもやっちゃえ！」

焼「犬にやっちゃえとは乱暴じゃあねえかなあ・・・ あ！！それより焼き賃をおいてけー！」

金「やだよ、泥棒！！」

焼「どっちが泥棒だよ。」

利 ってんで、この金をもって、きんべえさんが目黒に世帯をもち、「黄金餅」という餅屋を開き、たいそう繁盛したという、江戸の名物「黄金餅」の由来でございます。

光「え～経済学『黄金餅』・・・いえ落語『黄金餅』という一席をお伺い致しました。」

利+光「お後がよろしいようで・・・」